

パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して(XIV)

竹 下 春 日

前回迄において、われわれはパスカルの《アポロジー》を構成すべき《章》**chapitres** の順序を決定しえたので、今回以後、各章に配属すべき **Non classé** (未分類断章群) の所属判定の作業を行うことにし度い。

Laufuma は既に、彼の **Delmas** 版において、**Non classé** を彼自身の判定に従い、各章(既分類断章群 **Classé**) 中に分類配属せしめているので、われわれは彼による分類番号の順序に **Non classé** を取り上げて、われわれの作業を試みることにする。**Lafuma** の分類は、彼の直観に従って行われており、したがってなぜ或る断章が特定の章中に入れられたのか、われわれはこれを察知しえない場合が少からず存する。それゆえわれわれは、**Non classé** の所属判定に当っては、直観主義を排し、極力推論を用い理由を示して、これを行うことにする。従来われわれは、この方針を堅持して来たのであるが、この際われわれは直観的決定を出来る丈け避け、論証主義に徹すべきことを明言し、今後この方針の貫徹を期し度い。この方法は、学的に——積極的のみならず消極的にも——効果を有する。たとえ、われわれの推論が誤りであっても、後来の研究家は誤謬の個処を発見することによって、正しい推理の路線を進むことが、出来るからである。

(1)——**La. 1—Br. 105** について。この **fr.** は《欺瞞的諸勢力》の章 **le chapitre des puissances trompeuses** に属する。その理由は、次のごとくである。《欺瞞的諸勢力》の主たるものの一つに、《想像力》**imagination** が存することは、これを容易に推定しうる。なぜなら、《想像力。/これは人間

のなかのあの欺く部分のことである。なお誤りと偽りとの主であり、いつもずるいと決まっていなかったに、それだけいっそういずるいやつである。… …》からである。ところで La. 1 中には、《……相手の想像 l' *imagination* をその判断へ引き込むか、あるいは反対のほうへ追いやることになる。》という叙述があり、また《人相見がうまければ、顔の動きや様子とか声の調子とかから、この沈黙をどう推測するか……》という文も、本質上想像力にかんすることである。したがって、La. 1 はパスカルの所謂《欺瞞的諸勢力の章》中のものと、言いうるのである。

扨て《欺瞞的諸勢力》なる章名は、写本中のタイトル表中には、見出されない。しかし、La. 82—Br. 83 中には、パスカル自身明らかに、その欄外において《*Il faut commencer par là le chapitre des puissances trompeuses.*》と記しておるのであって、この章名の存在を疑いえない。おそらくこの断章 (La. 82) は、リヤス作製直前に執筆され、15° bis 《本性の墮落》(『本性は墮落している』の略称) *La nature est corrompue.* の章と、ほぼ同時期に書かれたものと、おもわれる。その理由は、両章がリヤス (断章綴 *liasses*) 構成上の形式的不備という点で、共通しており、他章との差異は極めて顕著だからである。したがってもしパスカルが、リヤスを作製した時点もしくはそれ以後において、タイトル表をも執筆したとするならば、彼は必ずや《*Puissances trompeuses.*》なるタイトルを表中に記入したに相違いないのである。またもしこの章名が不要ならば、これを抹消したに相違あるまい。それゆえ、この章名を欠くタイトル表なるものは、パスカルの手に成るものではないと、推定しうるのである。この理由からしても、写本中のタイトル表なるものが、パスカル自身に由来するものではないとするわれわれの結論 (VI 回参照) は、正しいものと言いうるのである。

(2)——La. 2—Br. 274 について。この fr. も《想像力》が主要勢力たる《欺瞞的勢力》にかんする章中にぞくする。この fr. 中の《……理性はあらゆる方向へ曲げられやすいものである。》は、La. 81—Br. 82 (《想像力》のタイトルを持つ) 中の《一陣の風が、しかもあらゆる方向にあやつる、おかしな理性。》と一致しているから。

(3)——La. 3—Ba. 29について。このfr. は1° 《順序》 *Ordre* の章に属する。これは《文体》にかんするもので、前半は次の如くである——《自然な文体を見ると、人はすっかり驚いて大喜びする。なぜなら、一人の著者を見るのを期待していたところを、一人の人間を見いだすからである。反対に、よい趣味を持ち、書物を見て一人の人間を見いだそうと思っていた人たちは、一人の著者を見いだして全く意外に思う。……》 この断章の主旨は、《*Ordre*》のタイトルを持つ La. 45—Br. 21の内容の一例と、見做しうる。La. 45は、次のごとくである——《順序。/ 自然は、あらゆる真理を、おのおのそれ自身のなかに置いた。それらすべてを、われわれの技巧が、一方を他方のうちへと閉じこめる。しかしそれは不自然である。おのおのの真理は自分の場所を占めている。》ところで両断章の内容を関係づけてみよう。そうすると、《自然な文体》とは「文体の《真理》——文体の眞のあり方が、如実に生かされている如き即ち《自分の場所を占めている》ごとき文体である」ということになり、両断章は内容的に十分な関連のあることが、判明する。しかも La. 45は一般的な命題を述べ、La. 3は特殊な事柄について述べたものであるから、後者は前者の一例にほかならず、したがって《*Ordre*》のタイトルを有する前者 (La. 45) とともに、後者 (La. 3) は、《*Ordre*》の章に属することになる。

(4)——La. 4—Br. 22について。このfr. は、《内容の配置》や言葉の異なった配置》また思想の《配置》、つまり内容や言葉を並べる順序をテーマにしたものであるから、1° 《順序》 *Ordre* の章にぞくする。

(5・6)——La. 5—Br. 9および La. 6—Br. 10について。この両断章はともに、5° 《現象の理由》 *Raisons des effets* に属する。いずれも、他人の間違いに対する指摘の仕方や人の確信にかんする理由を、述べたものであるから。

(7)——La. 7—Br. 252について。このfr. は、キリスト教の立場から、感情・理性・習慣と信仰との関係を述べたものであるが、理性・習慣と信仰との関連に触れたものに La. 396—Br. 245がある。両断章は、内容上関連している。ところで La. 396には、理性を信仰の手段として認め、これを排

除するものではない旨が述べられている。そうしてこの主旨を主題とする章は、13° 《理性の服従と利用》 *Soumission et usage de la raison* の章である。したがって La. 7 は、La. 396 とともに、13° に属することになる。

(8)—— La. 8 — Br. 19 について。この短断章の内容は、次のごとくである——《著作するときに、最後に考えつくことは、何を最初におくべきかを知ることである。》これは論ずる迄もなく、この fr. が 1° 《順序》の章に属することは、一読して明らかである。

(9)—— La. 9 — Br. 276 にいて。この断章は、気分の快・不快の《理由》にかんするものであるから、5° 《現象の理由》の章にぞくする。

(10)—— La. 10 — Br. 197 について。この fr. は、《大事なことを軽んずるまでに無感覚であり、しかも、われわれにとっていちばん大事な点で無感覚になる。》というものであるが、パスカルの所謂《われわれにとっていちばん大事な点》 *le point qui nous interesse le plus* とは、いったい何んであろうか。われわれはこれを、La. 11 — Br. 194 中に発見する——《靈魂の不死ということは、われわれにとって実に重要であり、実に深刻な関係を持つことがらであり、あらゆる感情をなくしてしまわないかぎり、そのことがどうなっているかについて無関心ではいられないはずである。……それゆえ、われわれの第一の関心、第一の義務は、この問題を明らかにすることであり、われわれのすべての行動はそれにかかっているのである。》(強調点は論者) こうして La. 10 と La. 11 とは、その内容の本質において密なる関係を存していることが、分る。

ところで La. 11 は、次の(11)において示されるごとく 18° 《宗教の基礎と反論への回答》の章に属すべきのものであるから、La. 10 も当然同章(18°)にぞくすると、言える。

(11)—— La. 11 — Br. 194 について。この fr. は、18° 《宗教の基礎と反論への回答》 *Fondements de la religion et réponse aux objections* の章にぞくする。なぜなら、この fr. は不信仰者の宗教批判に対する回答を、その内容としているからである。例えば、この fr. の冒頭の《……宗教を攻撃する前に、すくなくとも自分たちの攻撃する宗教がどんなものであるかを、

彼らに知ってもらいたい。》は、このことを明示している。

(12)—— La. 12—Br. 195について。この fr. も18°に属する。この断章の書き出しは、《キリスト教の証拠にはいるまえに、……》とあるから、これは La. 11の前に来るものである。なぜなら、La. 11の末尾は、《その証拠〔宗教の証拠〕を、私はここに集め、だいたい次のような順序に従った……》となっているからである。それゆえ、La. 12はLa. 11の所属する18°に所属する。

(13)—— La. 13—Br. 229について。この fr. およびLa. 312—Br. 427, La. 389—Br. 693は、すべて内容上相互に関連ないし一致しており、而してLa. 389は15°《人間を知ることから神への移行》の章にぞくしているので、三者ともに15°に所属すると、結論しうる(次回XV, 164参照)。

(14)—— La. 14—Br. 560について。この fr. は18°《宗教の基礎と反論への回答》にぞくする。La. 14中の《すなわち、われわれは悲惨であり、墮落し、神から離れてはいるが、イエス・キリストによって贖れていること、……》は、La. 11中の《……キリスト教の信仰は、次の二つの事柄を確立することにほとんど尽きるからである。すなわち、人間の本性の腐敗とイエス・キリストのあがないの二つである。》と一致しており、かつ両断章はともに宗教の《証拠》に触れている。そうして先述のごとく、La. 11は18°章に属するから(11参照)、La. 14は当然18°に属することになる。

(15)—— La. 15—Br. 194 ter について。La. 15は18°に属する。なぜなら、この fr. 中には、《かれら》ilsなる語が4個処に出ており、これらはすべて無信仰者ないしキリスト教を非難する者と、考えられるからである。また次の叙述も、これを示している——《君らは、私を回心させてしまうだろう。》*Vous me convertirez.* (La. 15) この文中の《君ら》vousも、無信仰の徒を指しているのもあって、この fr. 全体が、キリスト教に反対する人々の所論に対する回答の性格をもつことは、明瞭である。

(16)—— La. 16—Br. 560bis について。この fr. は、La. 14と内容的に一致しているので、後者と同じ章(18°)に属する(14参照)。

(17)—— La. 17—Br. 556について。この断章中の《……彼らは自分で知り

もしないことを罵っている。……／しかるに、彼らは、それらの二点のうち一方を肯定すべき論拠から、云々》の叙述に徴して、キリスト教に対する反論への回答であることは、明らかである。したがって、La. 17は18°の章に属する。

(18)——La. 18—Br. 419について。このfr. は7°《矛盾》の中のLa. 245—Ba. 420と表現こそ異なるが、内容的に一致するので、7°章にぞくする。

(19)——La. 19—Br. 243について。このfr. は、14°《この神の証明方法の卓越性》*Excellence de cette manière de prouver Dieu*の章中のLa. 381—Ba. 543と、その主旨において一致している。したがって、La. 19は14°にぞくする。

(20)——La. 20—Ba. 196について。この断章は、7°《矛盾》の章にぞくする。このfr. の要点は、人間の感覚の《奇怪な転倒》を説くにあり、そうしてこの《奇怪な転倒》とは、人間存在の矛盾した性格にかんするものであるから、La. 20は7°に属する。

(21)——La. 21—Ba. 196について。このfr. 中の《それらの人たち》なるものは、La. 15中の《かれら》と同類の人々を指しているから、La. 15と同じ章(18°)にぞくする(15参照)。

(22)——La. 22—Br. 193について。このfr. はLa. 20と内容上近似しており、したがって7°に属する。

(23)——La. 23—Br. 191について。このfr. の《むこう》*celui-là*とは、反キリスト教の立場にある人々を指し、また《こっち》*celui-ci*とは、パスカルの信奉するキリスト教の立場に立つ人々を意味しているから、これはキリスト教への《反論への回答》の一部と見做しうる。したがって、これ(La. 23)は、18°の《宗教の基礎と反論への回答》の章にぞくする。

(24)——La. 36—Br. 241について。この断章の小見出しが、《順序》となっているので、1°《順序》の章に属する。

(25)——La. 37—Br. 442について。このfr. は、次のごとくである——《人間の真の本性、彼の真の善、真の徳、真の宗教など、これらの認識は引き離すことのできないものである。》これは、内容上10°の《至福》の章中に見出されるLa. 300—Br. 425のタイトルの内容と、一致するものである。該

タイトルは、次のようである——《信仰のない人間は、真の善をも正義をも知ることができないということ。》したがって、La. 37は10°章にぞくする。

(26)——La. 38—Ba. 290について。この断章には、《宗教の証拠》*Preuves de la religion*なる見出しが附せられてあるが、このものは《宗教の基礎》をなすべきものであり、かつ宗教に対する《反論への回答》を構成するものであるから、当然18°章にぞくする。

(27)——La. 39—Br. 421について。このfr. は、次のごとく述べている——《私は、人間をほめると決めた人たちも、人間を非難すると決めた人たちも、気を紛らすと決めた人たちも、みな等しく非難する。私には、呻きつつ求める人たちにしか是認できない。》この叙述の前半は、人間の本質をさまざまに判断した立場および人間の本質を決定した後で、ないしこれを未決定のままに、《気を紛らす》逃避的態度に触れている。要するに前半の文章は、「人間知」にかんするものであるが、後半の《呻き求める》ことは、「真理」の探求を目指す人間のあり方を、叙している。而して真理とは、パスカルにあっては、究極するところキリスト教真理——神にかんするもの——にほかならないから、この断章の内容全体は、「人間の知」——「真理の追求」として、15°《人間を知ることから神への移行》の章に照応している。それゆえ La. 39は、15°章中のものである。

(28)——La. 40—Br. 74についてこのfr. は1°《順序》に属する。まずこのfr. 中には、《アポロジー》のプランにかんする叙述の配置関係についての指示がある。そうして1°章には、かかる指示を含む断章が見出される——例えば、La. 27—Br. 184, La. 34—Br. 246。以上の理由により、La. 40は1°章にぞくする。

(29)——La. 41—Br. 494について。このfr. は11°《A. P. R. 》にぞくする。なぜなら、その内容が11°所属の断章La. 309—Br. 430の冒頭と一致するから。

(30)——La. 42—Br. 499について。このfr. およびLa. 45—Br. 21, La. 46—Br. 20, La. 47—Br. 61の四者は、すべて1°に属する。これらの諸断章の小見出し（《順序》）が、1°章の章名と同じであるからである。

(31)——La. 43—Br. 562について。このfr. は、内容的に、La. 14—Br.

560と一致している。ところでLa. 14は18°に属するから(14参照), La. 43は当然18°にぞくすることになる。

(32)——La. 44—Br. 373について。この fr. は、《真の秩序》le véritable ordre について述べているので、1°《順序》Ordre の章に属するものである。《秩序》ordre なる語が4回、《無秩序》désordre が2回出ている。

(33・34・35)——La. 45—r. 21, La. 46—Br. 20, La. 47—Br. 61について。これらの fr. はすべて、《順序》なる小見出しを冒頭に掲げているので、1°《順序》の章に所属することは、明らかである。

(36・37)——La. 48—Br. 62, La. 49—Br. 242について。この二断章はそれぞれ《第1部の序言》Préface de la première partie, 《第2部の序言》Préface de la seconde partie であるから、特定の章に属さない独立のものであり、パスカルはこれを各《部》partie の頭初に置く予定であったと、推測される。

(38)——La. 90—Br. 162について。この断章は《人間のむなしさ》la vanité de l'homme について述べているので、当然2°《空しさ》Vanité の章にぞくする。なお同章中にはLa. 83—Br. 163があるが、これは《むなしさ。／恋愛の原因と結果。クレオパトラ。》という内容のものである。このことも、われわれの結論を支持している。

(39)——La. 91—Br. 404について。この fr. は、卑しむべき人間の名誉欲さえもが《人間の偉大さ》を示すものであるということを、結論としているが、同じ主旨の断章(La. 210—Br. 403)が、6°《偉大さ》Grandeur の章中に見出されるので、La. 91は6°に属すると、推定しうる。

(40)——La. 92—Br. 76について。この fr. は、次のごとくである——《学問をあまり深く究める人々に反対して書くこと。デカルト。》この叙述の要旨は、学問のむなしさを説くにある。同主旨のものが、2°《空しさ》中のLa. 60—Br. 67に見出される(この fr. は《学問のむなしさ》なる小見出しを有している)。したがって、La. 92は2°の章に属するものと、言いうる。

(41)——La. 93—Br. 153について。この fr. の冒頭の句は、《いっしょにいる人たちから尊敬されたいという願い。》というのであるが、これは2°

《空しさ》の章中の一断章La. 68—Br. 149の叙述内容の要旨と、一致している。また、《むなしさ》について叙している。以上によって、La. 93は2°に所属すると、推定しうる。

(42)——La. 94—Br. 150について。この断章は《虚栄心》vanitéについて述べているから、2°の《空しさ》Vanitéの章にぞくする。

(43)——La. 95—Br. 333について。このfr.の主旨は、前出のLa. 93の頭初の句の内容と一致しているので、2°にぞくする。

(44)——La. 96—Br. 401について。このfr.は、《榮譽》Gloireという小見出しを持つが、これは3°《惨めさ》Misèreの章中のLa. 111—Br. 151の小見出し——《誉れ》La gloireと一致するので、3°に所属することになる。

(45)——La. 97—Br. 436bisについて。このfr.中には、次の叙述が存する——《人々のあらゆる仕事は、富〔幸福〕bienを得ようとするにある。それなのに、彼らは、その富を正当に所有しているということを示すに足るだけの資格を持つことができないだろう。なぜなら、……その富をしっかりと所有するだけの力もないからである。》ところでこの引用文の主旨は、10°《至福》の章中におけるLa. 300—Br. 425中の次の文章と、内容的に連関している——《……この[・]渴望と[・]無力とが、われわれに叫んでいるものは次のことでなくて何であろう。……》(強調点は論者)それゆえ、La. 97は10°章中に所属すると、推定しうる。

(46)——La. 98—Br. 390について。このfr.は、次のごとき内容を持つものである——《いやはや。これはなんと愚かな議論だろう。「神が世界をつくったのは、それを地獄におとすためだったのだろうか。こんなに弱い人間から、そんなに多くを要求するのだろうか、等々」懷疑論は、この害毒に対する薬であり、この思い上がりを打ちすえるだろう。》この断章は、明らかにキリスト教の神に対する非難に答えるものである。したがってこの断章は、当然、18°《宗教の基礎と反論への回答》の章に属するものである。

(47)——La. 99—Br. 100について。このfr.の書き出しは、次のごとくである——《自己愛。／自己愛とこの人間の「自我」との本性は、自分だけを

愛し、自分だけしか考えないことにある。……》また断章中には、《……われわれが彼ら〔他人〕をだまし、われわれに値する以上に彼らから尊敬されたいと願う……》という叙述が、見出される。この二つの引用文の内容は、次のLa. 141—Br. 455中の叙述と一致している——《……自我は二つの性質を持っている。それはすべての中心になるから、それ自身、不正である。それは他人を従属させようとするから、他人には不快である。》ところでLa. 141は漸て述べるごとく、15° bis 《本性は墮落している》の章にぞくするから(65参照)、La. 99も15° bis の章に属することになる。

(48)——La. 100—Br. 275について。この fr. は、パスカルが新しく予定していた《欺瞞的諸勢力》の章にぞくする。なぜなら、《空想》*imagination* と、《心情》や《回心》等の心理的事実とが、《取り違え》られることを、テーマにしたものであるから。この章は、さまざまな欺瞞的勢力にかんするものであるが、その代表的なものは《想像力》*imagination* であるので、以下この章名を《想像力》の章と、便宜上呼ぶことにする。

(49)——La. 125—Br. 437について。この fr. は15° bis 《本性は墮落している》*La nature est corrompue.* の章に属する。というのも、この断章の最後の部分には、《この欲求〔真理と幸福に対する〕がわれわれに残されているのは、われわれを罰するためであると同時に、われわれがどこから墮ちたかを感じさせるためである。》とあるが、この文中の《どこから墮ちたか》*d'où nous sommes tombés* は、明らかに人間本性の墮落を指しているからである。

(50)——La. 126—Br. 174について。この fr. は《惨めさ》*Misère* という小見出しをもつので、当然3° 《惨めさ》*Misère* の章中にぞくする。

(51)——La. 127—Br. 414について。この fr. は、次のごとくである——《人間は、もし気が違っていないとしたら、別の違い方で気が違っていることになりかねないほどに、必然的に気が違っているものである。》この文中の《気が違っている》*fou* ということの、具体的詳述と見られるものが、10° 《至福》*Le souverain Bien* 中のLa. 300—Br. 425に見出される——《神だけが、人間の真の善である。そうして人間が神から離れて以来、自然

のなかで、人間にとって神の代わりになれなかったものは何もなかったというのは、奇妙なことである。……そして、真の善を失って以来、人間にとって、あらゆるものが、何でも真の善として見なされるようになり、神と自然とのすべてにあんなにも反する自分自身の破壊に至るまでそうなったのである。》(強調点は論者) ところでこの叙述は、La. 301—Br. 426, La. 132—Br. 439と内容的に連関しており、而してLa. 132は《墮落した本性》Nature corrompue なるタイトルを持つから、La. 127は15° bis《本性は墮落している》の章に属することになる。

(52)——La. 128—Br. 171について。この断章は、《惨めさ》Misère なる小見出しを持っているから、3° 《惨めさ》の章にぞくする。

(53)——La. 129—Br. 399について。この fr. は内容上、人間の惨めさを主旨として説いているので、3° 章に入る。

(54)——La. 130—Br. 441について。この fr. の主旨とするところは、人間の本性の墮落に存するから、15° bis の章に入る。

(55)——La. 131—Br. 406について。この fr. は次のようである——《思えば、あらゆる惨めさの重みと対抗し、それに打ち勝ってしまう。これこそ異様な怪物であり、きわめて明らかな迷いである。こうして自分の場所から落ちてしまっているのです、そのもとの場所を不安げにさがし求めている。それはすべての人々のしていることである。ではいったいだれがその場所を見つけたかを調べよう。》この叙述の後半は、神によるアダムの追放の結果としての、人間存在の根本的不安と、この不安からの脱出による元の至福状態(アダムの楽園における生活)への復帰の模索とを示し、《…だれがその場所を見つけたかを調べよう。》と述べて、この復帰に導く者がキリスト者であることを、暗示している。かようにして、この断章のテーマは、《人間を知ることから神への移行》を説く15° 章の内容に相応しいものである。したがってLa. 131は同章(15°)に属すると、判定しうる。

なおこの fr. は、La. 394—Br. 431の内容とその主旨において一致しており、La. 394も15° 章に所属するものであって、両断章は連関するものである(次回193参照)。

(56)——La. 132—Br. 439について。この断章の小見出しは、《墮落した本性》*Nature corrompue* となっているので、当然15° bisの章に入る。

(57)——La. 133—Br. 90, 87について。この fr. は《想像力》の章(《欺瞞的諸勢力》の章)にぞくする。なぜなら、この fr. 中には〈しばしば見るものについては、たといそれがいかにして起こるか不明でも、驚嘆しない。……〉というキケロの言葉が引用されているが、内容上同主旨と見做しうる事が、La. 81—Br. 82 (《想像力》なる小見出しを持つ)のうちにも、見出されるからである——《ある人は言う。「君は子供の時から、箱の中に何も見なければ、それは空^かだと信じていたので、真空というものを可能だと考えたのだ。だが、それは君の感覚の錯覚か、習慣によって強められたものにすぎない……」》。

われわれは《欺瞞的諸勢力》の章を、便宜上《想像力》の章と呼んでいるが、これは想像力が欺瞞的勢力の代表だからである。パスカルはLa. 81において、次のごとく述べている——《想像力。／これは人間のなかのあの欺^く部分^ぶのことである。あの誤りと偽りの主であり、元々》(強調点は論者)と。なお《欺瞞的諸勢力》の章については、既出の(1)および(48)を参照のこと。

(58)——La. 134—Br. 408について。この断章の最後の部分には、《……この特殊な悪に到達するには、善に到達するのと同様に、魂の異常な偉大ささえ必要とするのである。》という叙述があるが、これは6° 《偉大さ》*Grandeur* の章にぞくする fr. La. 210—Br. 403の内容と、その主旨において一致する——《現象の理由は、邪欲からあんなみごとな秩序を引き出した人間の偉大さを示す。》それゆえ、La. 134は6°章に所属するものと、言いうる。

(59)——La. 135—Br. 85について。この断章は《想像力》を中心内容とするものであるから、当然《想像力》の章に属すべきものである。

(60)——La. 136—Br. 102について。この fr. の内容は、次のようである——《他の悪徳によってのみ、われわれに結びついており、その幹を除けば、枝のように取り去られる悪徳もある。》ところでこの内容は、直前の断章(La. 135)と、直接連関を持つものと、言いうる。La. 135の内容は、次のごとくである——《自分の財産の貧弱なことを隠すといったような、われわれ

の心を最もつよく促えているこの種のことがらは、多くの場合、ほとんどとるにたらないことである。それは、われわれの想像力が、山のように大きくした、全くの無である。想像力がもうひとまわりすれば、われわれにそのことを苦もなく発見させてくれる。》この叙述を考察するとき、《ほとんどとるにたらないこと》を《苦もなく発見させてくれる》場合がありうる事が分るが、こうした場合というのは、《想像力がもうひとまわり》する場合である。したがって想像力には、《ひとまわり》する以前と以後との二つの場合があることになる。前者の場合は悪と結びつき、後者の場合は正しい立場、すなわち善と結びついている。後者の場合の一例は、想像力と《最も賢明な理性》とが、一致した場合である。次のLa. 81—Br. 82中の叙述は、この事にかんし叙している——《最も賢明な理性は、人間の想像力が、それぞれの場所で、向こう見ずに導入した諸原理を自分のものとして採用している……》。したがって、想像力が賢明な理性と一致協力し、かつ理性がキリスト教信仰によって強固に支持されるなら、想像力の《ひとまわり》 **un autre tour** は、可能であると、言いうる。

ところでパスカルは、《想像力はすべてを左右する。……われわれを、必然的な誤謬へ導くために、特に与えられたかのように見えるこの欺瞞的能力の作用云々》(La. 81——強調点は論者)と、書いている。この叙述によって、われわれは想像力こそ、《自己愛》 **amour propre** と協力して諸悪を作り出している《誤りと偽りとの主》 **cette maîtresse d'erreur et de fausseté** (La. 81)であることを、知るのである。したがって諸悪の根源たる想像力の働きを正しい方向へ転じうるならば、これに基づく一切の悪は影を潜めることになる。そうしてこの結論が、われわれの問題としているLa. 36の内容と符合一致していることは、明らかである。こうしてこの断章は、われわれの所謂《想像力》の章中に編入さるべきものであることが、分る。

(61)——La. 137—Br. 407について。この fr. は多くの章に連関せしめうるが、特定の章を指定しがたい。したがって、未決定のまま保留することにする。

(62)——La. 138—Br. 84について。この fr. は《想像力》について説くもの

であるから、当然《想像力》の章に所属する。

(63)——La. 139—Br. 173について。この断章は、占いないし予言が《不幸は普通にある》*les malheurs sont ordinaires* ということ、即ち人間の惨めさなるものを、考慮に入れているという事実を説いているので、3° 《惨めさ》の章にぞくする。

(64)——La. 140—Br. 186について。この fr. は13° 《理性の服従とその利用》*Soumission et usage de la raison* の章にぞくする。その理由は、この fr. の主旨が、La. 357—Br. 185 (13° 章中のもの) の叙述内容と一致するからである。

(65)——La. 141—Br. 455について。この fr. の内容は、《自我は憎むべきものだ。》ということであり、その理由を、パスカルは《……私がそれ〔自我〕を憎むのは、それが不正であり、それがすべてのものの中心となるからだ……》と、述べている。而して自我の《不正》*injustice* ということは、畢竟人間本性の墮落に由来しているからして、この断章は 15° bis 《本性は墮落している》の章中にぞくする。

またLa. 141は、パスカルの友ミトンの意見を対象とするものであるが、La. 145—Br. 448も、ミトンの言と関係しており、この断章中で、パスカルは《〔ミトン〕は、本性が墮落しており、人間が道義に反しているのを、よく見ている。……》(強調点は論者)と述べている。両断章はともに、ミトンの言説に関連したものであり、そうしてLa. 145は人間本性の墮落に触れているので、この点からしても、La. 141は15° bis に所属するものと、推定しうる。

(66)——La. 142—Br. 214について。この fr. は、《不正》*Injustice* という小見出しがあるので、3° 章にぞくする。なぜなら、Classé の3° 章中には、《不正》*Injustice* なる小見出しを有する断章が2個 (La. 114—Br. 326, La. 115—Br. 879) 存し、La. 142はこれらと内容上連関しておるからである。

(67)——La. 143—Br. 109について。この fr. は、次の冒頭の文をもって始まっている——《自然は、あらゆる状態においてわれわれをいつも不幸にするので、われわれの願望は、幸福な状態というものをわれわれに描いてくれる。》この文の主旨は、次の叙述 (La. 300—Br. 425の冒頭) の言わんと

するところと、まったく一致している——《すべての人は、幸福になることをさがし求めている。》(10°《至福》の章) それゆえLa. 143は、La. 300を含む10°章中のものである。

(68)——La. 144—Br. 109について。この fr. 中で、パスカルは健康な場合と病気の時との人間心理の変化を述べ、次いで以下のごとく書いている——《われわれを悩ます心配というのは、自然ではなく、われわれが自分自身に与える心配だけなのである。なぜなら、その心配は、われわれの現に在る状態に、われわれの現にない状態の情念を結合させるからである。》この叙述の内容は、直前のfr. La. 143と近似しているが、後者は願望の増大による幸福への未到に重点がおかれ、今扱っている fr. では、想像による主観的状态(《心配》)に、重点が置かれている。したがって、La. 144は《想像力》の章に入る。

(69)——La. 145—Br. 448について。この断章は、《本性が墮落している》*la nature est corrompue* ことについて述べているので、同名の章15° bis にぞくする。

(70)——La. 146—Br. 372について。この断章の要旨は、2°《空しさ》*Vanité* の章中におけるLa. 65—Br. 436およびLa. 70—Br. 374が言わんとする主旨——人間の《弱さ》*faiblesse* ——と、一致している。したがって、2°章にぞくすると、言える。

(71)——La. 147—Br. 124について。この fr. は《想像力》の章にぞくする。なぜなら、この断章中に示されているごとき人間のものの見方の相対性と誤謬の原因が、La. 81—Br. 82, La. 82—Br. 83中に述べられているからである。

(72)——La. 148—Br. 175について。断章La. 81—Br. 82中には、《想像力には想像の上での幸福な者、不幸な者、じょうぶな者、病める者、貧しい者がある。》(強調点は論者)という叙述があるが、これと内容上一致連関する叙述が、La. 148には見出される——《われわれは自分自身のことを実にわずかししか知らないので、多くの人、健康なのに、近く死にはしないかと考えている。また、多くの人、死が近いのに、健康だと思っている。

……》したがってLa. 148は、《想像力》の章にぞくする（La. 81は《想像力》なるタイトルを持っているゆえ、当然《想像力》の章——《欺瞞的諸勢力》の章にぞくする。）

(73)——La. 149—Br. 108について。この fr. は、《人々が、その言っていることに利害関係を持っていないからといって、その人たちが嘘をついていないと、絶対的に結論するわけにはいけない。》ということの理由を述べているからして、5°《現象の理由》Raison des effets に所属する。

(74)——La. 150—Br. 456について。この fr. は、次のことを述べている——《なんという判断の錯乱であろうか、人々が、他のすべての人々の上に出ようとし、自分自身の善、自分の幸福と生命との永続を、他のすべての人々のそれらよりも好まずにいられないとは。》この叙述の主旨とするところは、10°章中のLa. 300—Br. 425における《すべての人は、幸福になることをさがし求めている。それには例外がない。》と同じである。それゆえLa. 150は、10°《至福》の章に入る。

(75)——La. 151—Bra258について。この fr. は、パスカル自身による引用文——〈各人は自分のために神を作る〉から成り立っているが、この文の内容は、La. 300—Br. 425（10°《至福》の章中にぞくする）の重要部分と一致している。すなわち、後者にあっては、《……人間が神から離れて以来、自然のなかで、人間にとって神の代わりになれなかったものは何もなかったというのは、奇妙なことである。云々》の記述が、見出される。したがって、La. 151は10°章に属する。

(76)——La. 152—Br. 212について。この断章の内容は、次のごとくである——《流転。／持っているものがみな流れ去ってしまうを感じるのは、恐しいことだ。》ところで、この《流転》écoulement の一例が、La. 146—Br. 372に見出される。すなわち、《私の考えを書きとめている途中で、それがときたま逃げてしまうことがある。だがこのことは、つい忘れがちな、私の弱さというものを思いおこさせてくれる。……》（強調点は論者）が、これである。かように両断章は、思想上明らかに関連している。而してLa. 146

は、2°《空しさ》の章に属しているから(70参照)、La. 152も同章に所属する。

(77)——La. 153—Br. 88について。この fr. 中には、《思いつき》*fantaisie* という《*imagination*》と意義上連関を有する表現があり、かつLa. 147—Br. 124の内容と対応一致している。この際La. 147は、既に論証したごとく(71.72参照)、《想像力》の章にぞくするから、La. 153も当然同章に所属すると、言いうる。

(78)——La. 154—Br. 101について。この fr. 中の《もしすべての人が、それぞれが、他人のたちについて言っていることを知ったとしたならば、この世に四人と友人はあるまいということを、私はあえて提言する。》という叙述は、人間関係の浅ましさを具体的に説いているので、この fr. は3°《惨めさ》の章中にぞくする。

(79)——La. 155—Br. 351について。この断章の説くところは、9°《哲学者たち》*Philosophes* の章所属のLa. 284の《ストア派》*stoïques* の主張に対する反論と見られるから、やはり同章にぞくする。

またこの fr. (La. 155) は、La. 711—Br. 352とも関連している。したがって、La. 711も9°にぞくすることになる。すなわち、La. 155はストア派の主張を事実に照らして考察した結果を述べたものであり、La. 711はこの結果に基づいたパスカル自身の、人間の行為に対する評価の仕方を述べて、ストア派の意見を非としたものであると、言える。

(80)——La. 156—Br. 165について。この fr. は、《気を紛らす》*divertir* ことの必要を述べている。また、その内容がLa. 267—Br. 168のそれと一致している。以上二つの理由により、La. 156は8°《気晴らし》*divertissement* の章にぞくする。

(81)——La. 160—Br. 131について。この断章の小見出しが、《退屈》*Ennui* となっているので、当然4°《退屈と人間の本質》の章に入る。

(82)——La. 161—Br. 417について。この fr. は次のごとくである——
《人間のこの二重性はあまりにも明白なので、われわれには二つの魂がある

と考えた人たちがあつたほどである。／彼らには、度はずれた思い上がりから恐ろしい落胆にまで至る、こんなに、そして急激な変化が、単一の主体に起こりうるとは思えなかつたのである。》ところでわれわれは、この叙述内容と本質的に連関を有する次の文章を、La. 390—Br. 72中に発見するのである——《われわれは、あらゆる方面において限られているので、両極端の中間にあるというこの状態は、われわれのすべての能力において見いだされる。》、《……それゆゑに、われわれは何の確かさも堅固さも求めるのをやめよう。われわれの理性は、常に外觀の定めなさによって欺かれている。何ものも有限を、それを取り囲み、しかもそれから逃げ去る二つの無限のあいだに固定することができないのである。》

以上要するに、La. 161は、人間の《二重性》*duplicité* なるものが、人間存在の根本的なる《中間》*le milieu* 状態に起因するものたることを、説くものである。それゆゑ、La. 161の内容は、本質上La. 390を一部として含む15°章のものと、言いうる。

(83)——La. 162—Br. 94について。この fr. は、7°《矛盾》*Contrariétés* の章にぞくする。理由は、以下のごとくである。(イ) La. 162中の《どんなものでも自然なものとされ、云々》の《自然なものとされ》る *on rend naturel* ということは、La. 240—Br. 92, La. 241—Br. 93における《習慣》と《自然》の關係にかんする叙述（これが両断章の主旨である）に徴して、「習慣を通じて自然なものとなる」という意味に解される。すなわち、La. 162はLa. 240, La. 241と内容上連関することになり、しかも後者はともに7°章中のものであるから、La. 162も同章にぞくすることになる。(ロ) 7°章中のLa. 236—Br. 418中には、《人間に対して、彼の偉大さを示さないで、彼がどんなに獣に等しいかをあまり見せるのは危険である。……／人間が獣と等しいと信じていけないし、云々》の叙述が存するが、この文中の《獣》*bêtes* なるものは、実質上La. 162中の《全くの動物》*omne animal* の *animal* と同義であるから、La. 162はやはり7°章と關係することになる。

(84)——La. 163—Br. 129について。この fr. は、次のごとくである——《われわれの本性は運動のうちにある。完全な静止は死である。》この内容は、

La. 160—Br. 131中の《人間にとって、完全な休息のうちであり、情念もなく、仕事もなく、気ばらしもなく、集中することもなしでいるほど堪えがたいことはない。》と一致している。ところでLa. 160は4°章に所属するものであるから(81参照), La. 163も当然同章にぞくする。

(85)——La. 164—Br. 457について。この fr. の前半は、次のごとくである——《各人は各自にとって一つの全部である。なぜなら、我が死ねば、彼にとってすべてのものは死ぬからである。ここからして各人はすべてのものにとって全部であると思うようになる。》この文の要旨は、La. 141—Br. 455中の人間のエゴイズムにかんする叙述(65参照)と、一致している。La. 141は、15°bis 章に属しているから、この fr. も同章に属することになる。

(86)——La. 165—Br. 94 bis について。この fr. は、《人間は、本来、〈全くの動物〉である。》という短断章であるが、これは人間の《本質》に関するものであるから、4°《退屈と人間の[・]本[・]質[・]》の章にぞくする

(87)——La. 166—Br. 359について。この fr. は、15°bis 《本性は墮落している》の章に入る。その理由は、以下のごとくである。(一)この断章は、人間墮落の結果たる《悪徳》vices の支配力について、述べている。(二)La. 145—Br. 448は、次のごとく述べている——《[ミトン]は、本性が墮落しており、人間が道義に反しているのを、よく見ている。だが、なぜ人間がいつそう高く飛びかけりえないかを知らない。》

この文中の最後の部分にかんする理由を示すものが、じつにfr. 166の内容と考えられる。しかもLa. 145は、15°bis の章に属するのであるから(69参照), La. 166も同章にぞくする。

(88)——La. 167—Br. 323について。この fr. の主旨を示す一例が、次のように述べられている——《だれかをその美しさのゆえに愛している者は、その人を愛しているのだろうか。いな。なぜなら、その人を殺さずにその美しさを殺すであろう天然痘は、彼がもはやその人を愛さないようにするだろうからである。》この例が言われとすところは、実質上、有名な次の断章の内容と軋を一にしている——《人間のむなしさを十分知ろうと思うなら、恋愛の原因と結果とをよく眺めてみるがよい。……／クレオパトラの鼻。そ

れがもっと短かったら、大地の全表面は変わっていただろう。》(La. 90—Br. 162) それゆえ、La. 167はLa. 90と一致し、後者は2°《空しさ》の章にぞくするので(38参照)、前者も同章に属することになる。

(89)——La. 168—Br. 118について。この fr. は《想像力》の章にぞくする(次の90参照)。

(90)——La. 169—Br. 147について。この fr. の内容が、人間の想像力にかんするものであることは、次の叙述に徴するだけでも、明瞭である——
《……われわれは絶えず、われわれのこの仮想の存在を美化し、保存することのために働き、ほんとうの存在のほうをおろそかにする。そして、もしわれわれに、落ち着きや、雅量や、忠実さがあれば、それをわれわれの別の存在〔架空の自己〕に結びつけるために、急いでそれを知らせる。それを別のほうに加えるためには、われわれ〔真の自己〕から離すことだってしかねないのである。》この引用文の前半は、われわれなるものの《想像力》について述べたものであり、そうして後半は、この想像力に基づく自我の派生的なしかし自己中心的な行動というものを、叙している。そして自我の一番基本的な能力である想像力と、派生的な諸活動の能力との対立は、La. 168 中の《他のすべての才能を規整する、おもな才能。》における《おもな才能》*talent principal* と《他のすべての才能》*tous les autres* との対立に、符合している。それゆえ、La. 168はLa. 169と内的に係わりを持つ、したがって両断章は、ともに《想像力》の章に属するものと、言わねばならない。

(91)——La. 194—Br. 89について。この fr. は、5°《現象の理由》*Raison des effets* の章にぞくする。なぜなら、この断章は、《信仰を信じ》ていることという現象の理由として、《信仰に慣れ》ていることを挙げているからからである。

また、この断章の後半も、習慣(理由)とその結果(現象)について触れている——《……われわれの靈魂も、数、空間、運動を見ることに慣れたため、それを信じ、それだけしか信じないのであるということを、だれが疑うであろう。》

(92)——La. 195—Br. 325について。この断章も、法・習慣(理由)とこ

これらのものへの服従（現象）について述べているので、5°章に入る。

(93)——La. 196—Br. 331について。この fr. は、プラトンやアリストテレスのごとき賢人たちの表面的行動（現象）とその理由について述べるものであるから、5°章にぞくする。

(94)——La. 197—Br. 303について。(イ) この fr. は、《力》la force と《世論》l'opinion との因果関係、すなわち両者のいずれが、《effet》であり《raison》であるかを、論じている。したがって、5°《現象の理由》の章にぞくする。(ロ) 次に、5°章には、《力》と《正義》の関係を論ずるLa. 192—Br. 248が存在する——《正義は論議の種になる。力は非常にはっきりして、論議無用である。》ところで、この文中の《論議》dispute なるものは、常識的に言って、世の人々を前提にしていると、見られる。すなわち、《論議》とは実質上世人の論議、したがって《世論》を代表例として考えるごとき論議として、これを解しうる。それゆえ、La. 192は、《力》と《正義》との関係を直接論ずるものであるが、これは同時に《力》と《世論》との関係をも、間接的に扱っているのである。つまり、La. 192とLa. 197とは、内容上連関しており、したがってLa. 197はLa. 192の所属する5°章に入ることになる。

(95)——La. 198—Br. 312について。この fr. は、《正義》la justice と《既成の法律》lois établies との、即自的一体化が、一般の信念のうちには見出されるということ、主旨としているが、同主旨のものが、既にLa. 195—Br. 325中に見出される。したがってLa. 198は、La. 195と同じ章中に所属するものと、言いうる。すなわち、La. 198は5°章にぞくする(92参照)。

(96)——La. 199—Br. 452について。この fr. の内容は、次のごとくである——《不幸な人々に同情するのは、邪欲にさからうことではない。反対に、人はそういう好意のしるしを示し、何も与えずに、情けぶかいという評判をとりたがるものだ。》この叙述は、《自己愛》amour-propre を説く、La. 99—Br. 100中の次の叙述と、その主旨を等しくしている——《……われわれが真実と、それをわれわれに言ってくれる人たちとを憎み、彼らがわれわれに有利になるように思い違いをしてくれるのを好み、そしてまた、われわれが

現にそうであるのとは別のものとして彼らから評価されたいと願っているのは、ほんとうではなかろうか。》要するに、La. 199は《自己愛》の一例であると考えられるので、La. 99と同じ章(15°bis)中に属すべきものである(47, 65参照)。

(97)——La. 200—Br. 311について。この fr. は、前出のLa. 197—Br. 303と同じく、《力》と《世論》との関係を扱っているので、La. 197と同じ章(5°)に属するものと、見るべきである。

(98)——La. 201—Br. 301について、この断章は、《力》というタイトルを持っており、また内容も、5°章所属のLa. 192—Br. 298中の《正義は論議の種になる。力は非常にはっきりしていて、論議無用である。》と、同主旨である。したがって、La. 201も5°章に属する。

(99)——La. 202—Br. 96について。この断章は、《自然の作用を証明する》*prouver des effets de la nature* ための《理由》*raisons* にかんするものであるから、5°章《現象の理由》に所属することは、明らかである。

(100)——La. 203—Br. 176について。この fr. は、クロンウェルの歴史的事実にかんするものであり、神の摂理の歴史を背景としている。而して歴史を神の摂理の下に観る思想は、23°章のLa. 594—Br. 701中に見られる——《ダリウスとクロス、アレクサンドロス、ローマ人、ポンペイウスとヘロデが、福音の栄光のために、そうとは気づかずに働いているのを、信仰の目をもって見るのは、なんとすばらしいことか。》それゆえLa. 203は、23°《イエス・キリストの証拠》の章中に入ることになる。

(101)——La. 204—Br. 306について。この fr. は、《公爵領》や《王権》、《司法職》といったものが、《力》*force* と結びついていることを説いているが、同様の思想が、5°章中のLa. 185—Br. 316にも見られるので、この fr. (La. 204) も同じ章のものであると、言うる。

(102)——La. 205—Br. 393について。この断章の要旨は、次の叙述に存する——《神と自然 *la nature* とのあらゆる掟を放棄しておきながら、自分らで掟をつくり、それにきちんと従っている人たちがこの世にあるということを考察するのは、おもしろいことである。云々》こうした異常な状態が、可

能になる根本的理由は、パスカル自身によって、次の断章(La. 301 — Ba. 425)中に述べられている——《真の本性 *la vraie nature* が失われたので、すべてのものが彼の本性になる。……》すなわち、前者の断章の述べるところは、後者の内容の一例と見られるから、両者は同じ章に属するものと、判定しうる。ところで後者(La. 301)は、内容上明らかに人間本性の墮落にかんするものであるから、これらはともに15°bis 《本性は墮落している》の章に属するものと、見るべきである。

(103)——La. 206—Br. 122について。この fr. は、5° 《現象の理由》の章にぞくする。なぜなら、冒頭には《時は、苦しみや争いを癒す。》と書かれ、直ぐ次に《なぜなら人は変るからである。 *parce qu'on change* ……》という理由が述べられ、以下理由を具体例によって、詳述しているからである。

(104)——La. 207—Br. 304について。この fr. は、階級としての《段階》 *degrés* が形ち造られる理由と過程にかんするものであるから、5°章にぞくする。

(105)——La. 208—Br. 320bis について。この fr. は、結論的には5°に属すべきものである。その理由は、(イ)——《世の中で最も不合理なことが、人間がどうかしているために、最も合理的なことになる。》というこの断章冒頭の命題にかんするものだからである。すなわち、《世の中で最も不合理なことが、最も合理的なことになる。》という逆説的な現象とその理由——《人間がどうかしていること》 *le dérèglement des hommes* とが、述べられている(そうしてこの断章の全体は、この冒頭の主旨を、詳述したものにすぎない)。(ロ)——次に、この断章の末尾には、《……内乱こそ最大の災いである……》と記されているが、これは5°章中の fr. La. 184—Ba. 313の最初の部分——《最大の災は内乱である。》と一致している。以上二個の理由により、La. 208は5°章中のものと、結論しうる。

(106)——La. 223—Br. 400について。この fr. の小見出しは、《人間の偉大さ》 *Grandeur de l'homme* となっているので、当然6° 《偉大さ》 *Grandeur* の章にぞくする。

(107)——La. 224—Br. 277について。(イ) この fr. の前半は、次のごと

くである——《心情は、理性の知らない、それ自身の理由を持っている。人はそのことを数多くのことによって知っている。／私は言う。心情が自然に普遍的存在を愛するのも、自然に自分自身を愛するのも、自分からそれに打ちこむからなのである。》この断章は、《心情》*le coeur*が《理性》*la raison*とは異なる独自の能力を有していることを、反面から言えば《理性》は決して唯一の秀れた能力ではないということ、換言すれば《理性》の能力には限界が存するということを、説くものである。即ち、両能力はそれぞれ独特の長所と個性を持つものであるから、パスカルの立場からすれば、これらを宗教のために適切に使用するのが当然である、ということになる。したがってLa. 244は、その意味するところから言って、13°《理性の服従と利用》の章に入ることになる、考えられる。

(ロ)次に、13°章中のLa. 364—Ba. 256中には、《心情の直感によって信じているすべての人たち》のことが、触れられているが、この叙述が前後の文意から推して、神への信仰を意味するかぎり、La. 224中の《普遍的存在》*l' être universel* への愛と照応一致していることが、分る (La. 364中の《普遍的存在》なるものが、神以外の普遍者を含む広い意味において述べられているとしても、斯く言いうる)。それゆえ、この一致関係から推して、La. 224はLa. 364をふくむ13°章中に所属すると、判定しうるのである。

(108)——La. 225—Br. 278について。この断章の内容は、次の如くである——《神を感じるのは、心情であって、理性ではない。信仰とはこのようなものである。理性にではなく、心情に感じられる神。》ところで、fr. La. 214 (13°章)の終りの部分には、次のごとく述べられている——《……神から心情の直感によって宗教を与えられた者は、非常に幸福であり、また正当に納得させられているのである。……このことがなければ信仰は、人間的なものであるのにとどまり、魂の救いのためには無益である。》この二つの引用文を比較するとき、これら両者の内容的一致は、明白である。それゆえ、La. 225も13°章中に所属するものと、判定しうる。

(109)——La. 226—Br. 146について。この fr. は、《考える》*penser* ことと人間の《尊厳》*dignité* との関係を要旨としているが、6°《偉大さ》の章

中のLa. 217—Br. 348にも、同主旨の思想が述べられている。この断章こそは、有名な《考える葦》*roseau pensant* の断章である。それゆえ、La. 226は6°章にぞくする。

(110)——La. 227—Br. 411について。この断章は、《われわれを高めてい
る押えつけることのできない本能》(強調点は論者) *un instinct que nous
ne pouvons réprimer*, つまり人間の《偉大さ》への本能を述べたものであるから、6°章に属するものと、言える。

(111)——La. 228—Br. 369について。この fr. は、次のようなものである——《記憶は、理性のあらゆる作用にとって必要である。》この断章の内容と直接関連する別の断章を発見し難いので、われわれはこれを分類しがたいものとして、保留する。

(112)——La. 229—Br. 353について。この fr. は、人の《徳》*vertu* と人の《偉大さ》*grandeur* との関係について述べているので、6°章にぞくする。

(113)——La. 230—Br. 341について。この fr. は、《静魚》と《蛙》の行動が本能的習慣性のものであって、《別の精神的なこと》*autre chose d'esprit* を行動に表わしていないことを、述べている。そうしてこの叙述は、人間の行動の高い精神性との対比を前提ないし予想するものであることが、看取される。ところで、6°章中のLa. 221—Ba. 409中には、次の叙述が見られる——《人間の偉大さは、その惨めさからさえ引出されるほど明白である。なぜならわれわれは、獣においては自然なことを、人間においては惨めさと呼ぶからである。》この文中《獣においては自然なこと》*ce qui est nature aux animaux* の実例が、まさにLa. 230であると、考えられる。したがって、この断章は6°章に属するものと、見做される。

(114)——La. 231—Br. 340について。この fr. の要旨その他は、直前のLa. 230と変るところはない。異なるところは、動物ではなく、《計算器》が出て来ることだけである。したがって、この fr. も6°章にぞくする。

(115)——La. 232—Br. 365について。この fr. 中には、《考えとは、その本性からいって、なんと偉大で、その欠点からいって、なんと卑しいものだろう。》という叙述が結論となっているが、これは《考え》なるものが、《偉大》

と同時に《卑しいもの》という対立した性格を有しているので、7°《対立(矛盾)》*Contrariétés*の章にぞくする。

(116)——*La. 233—Br. 346*について。これは、《考えが人間の偉大さをつくる。》という短断章で、内容上6°章にぞくする。

(117)——*La. 247—Br. 438*について。この fr. は、《もし人間が神のために作られたのでなければ、……》という仮定と、《もし人間が神のために作られたのならば、……》という仮定とを掲げ、いずれの場合にも、これに矛盾し対立する現象が人間に見られると、述べている。したがって、この断章は、7°《対立》*Contrariétés*の章に属する。

(118)——*La. 248—Br. 424*について。この fr. の内容は、次のごとくである——《宗教を知ることから私を最も遠ざけるように見えた、これらのあらゆる対立は、私を最も速く真の宗教に導いてくれたものである。》この叙述は、《対立》*contrariétés*を真の宗教への重要な出発点として述べているので、この fr. は7°章にぞくする。

(119)——*La. 249—Br. 413*について。この fr. は、《理性対情念のこの内部の戦い》*cette guerre intérieure de la raison contre les passions*を主旨とするものであるから、7°《対立》の章に属すべきものである。

(120)——*La. 250—Ba. 588bis*について。この断章の小見出しは、《対立》*Contrariétés*となっているので、当然7°章に入る。

(121)——*La. 251—Ba. 70*について。この fr. は、Lafuma の Delmas 版では、書き出し(おそらく見出しとおもわれる)の《自然は……ない》*Nature ne p ……*を除いて、これ以外の叙述は、パスカル自身によって抹消されたことになっているが、Editions du Seuil (1963, P. 577)では、書き出しの部分も *rayer* されているので、この fr. を省く。

(122)——*La. 252—Ba. 443*について。この fr. の小見出しは、《偉大、悲惨。》*Grandeur, misère.* となっているが、類似の見出しが、7°章の二個の断章に見出される。すなわち、*La. 234—Br. 423*には、《*Contrariétés. Après avoir montré la bassesse et la grandeur de l'homme.*》とあり、また *La. 237—Br. 416*には、《*A P. -R. Grandeur et misère.*》とい

うタイトルが、見出される。したがって、La. 252は7°章にぞくする。

(123)——La. 253—Br. 412について。この fr. は、《理性と情念とのあいだの人間の内戦。》*Guerre intestine de l'homme entre la raison et les passions.* について説くものであるから、7°章にぞくする。

(124)——La. 254—Br. 97について。この fr. の最初の文章は、次の通りである——《一生のうちでいちばん大事なことは、職業の選択である。ところが、偶然がそれを左右するのだ。》ところで、内容上これと連関類似する fr. が、7°章には存在する——《……いかに多くの天職があることだろう。そして人は、普通、どんな偶然から、ある職業がほめられるのを聞いてそれを選ぶことだろう。云々》(La. 244—Br. 116) かように両断章の連関は明らかであるあら、La. 254は7°章にぞくする。

(125)——La. 255—Br. 377について。この断章の終りの部分は、《われわれは、嘘、二心、矛盾 (*contrariété*) だらけである。》(強調点は論者) となっているが、これは、7°章所属のLa. 246—Br. 434中の次の叙述と、大意を等しくしている——《では、人間とはいったい何という怪物だろう。何という新奇なもの、何という妖怪、何という混沌、何という矛盾の主体 (*sujet de contradiction*)、何という驚異であろう。》(同上) したがってLa. 255は、7°章中のものである。

(126)——La. 256—Br. 81について。この fr. は、以下のごとくである——《精神は自然に信じ、意志は自然に愛する。したがって、両者とも真の対象がなければ、誤った対象に執着せざるをえない。》この叙述は、10°《至福》*Le Souverain Bien* の章中のLa. 300—Br. 425における次のごとき重要な叙述と、至大の関係を持っている——《神だけが、人間の真の善である。そして人間が神から離れて以来、自然のなかで、人間にとって神の代わりになれなかったものは何もなかった……》。前者の断章における《真の対象》*vrais objets* とは、後者の断章中の《真の善》*véritable bien* たる《神》*Dieu* を代表とするものであり(パスカルにとっては)、また前者における《誤った対象》*faux objets* とは、後者中の《神の代わりにな》った《自然》*la nature* ——パスカルは、その例として、天体・天・地・元素・植物・キ

ャベツ・ねぎ・動物・昆虫・子牛・蛇・熱病・ペスト・戦争・飢饉・悪徳・姦淫・不倫等を挙げている——が、その典型であることは、両者の文意から推して、明らかである。それゆえ、両断章は内容上密接な関連を有し、したがってLa. 256はLa. 300の所属する10°章に所属することになる。

(127)——La. 257—Br. 358について。この fr. のテーマは、《人間は、天使でも、獣でもない。》ということばである。同じテーマが、7°章中のLa. 236—Br. 418にも見られる——《人間が獣と等しいと信じてはいけないし、天使と等しいと信じてはいけない……》。したがって、La. 257は7°章にぞくする。

(128)——La. 258—Br. 180について。この fr. は、次のごとくである——《地位の高い者にも低い者にも、同じ事故、同じ悩み、同じ情欲がある。ただ、一方は車輪の上のほうにあり、他方は中軸の近くにいる。だから後者は、同じ運動によっても揺り動かされ方が少ない。(イ)——《この断章の最後の部分、すなわち《同じ運動によっても揺り動かされ方が少ない。》ということの理由が、《ただ、一方は車輪の上のほうにあり、他方は中軸の近くにいる。》こととして、示されている。言い換れば、断章の最後の部分は、結果ないし現象であり、《ただ一方は、……》の叙述は、その原因ないし理由である。したがってこの fr. は、5°《現象の理由》の一例と考えられ、同章(5°)に属するものと見做される。

(ロ)——次にこの断章(La. 258)は、5°章中のLa. 173—Br. 327における最後の部分と、内容的に連関を持っている。この部分の叙述は、次のごとくである——《民衆と識者とが世間の動きを構成している……》。扨てLa. 258の《車輪》la roueの《動き》les mouvementsとは、常識的に見て、《世間の動き》と解しうる。La. 173によれば、《民衆》le peupleは《世間の動き》le train du mondeを《構成している》composerのであるから、世の動きの構成要素と言いうる。そしてLa. 258にあっては、《地位の低い者》les petits——これは大略《民衆》に等しい——は、世間の動きの象徴たる《車輪》の《中心》le centre 近くに位置を占めるところの、即ち動揺少なき、廻転運動の構成要素にほかならない。かくして、La. 258とLa. 173とは、内面的関

連を有しており、したがってこの点からも、前者が5°章に属することが、分るのである。

(129)——La. 259—Br. 215について。この fr. は、人間心理の矛盾した性格を説くものであるから、7°《対立》の章にぞくする。

(130)——La. 260—Br. 532について。この fr. 中には、次のような叙述が存する——《……自然も、自然的と道徳的との二つの無限によって、同じことをしたように見える。なぜなら、われわれが高いものと低いもの、上手なものと下手なもの、りっぱなものと惨めなものとをいつも持っているのは、われわれの高慢を引き下げ、われわれの卑屈を高めるためであろうからである。》ところで、この fr. 中の《二つの無限》*deux infinis* なるものは、かの高名なる断章La. 390—Br. 72中において、美事に詳説されているところである。例えば、同断章中には、次の文章が見出される——《……そして自分が、自然の与えてくれた塊のなかに支えられて無限と虚無との二つの深淵の中間にあるのを眺め、その不可思議を前にして恐れおののくであろう。そして彼の好奇心は今や驚嘆に変わり、これらのものを僭越な心でもって探求するよりは、沈黙のうちにそれを打ち眺める気持になるだろうと信ずる。》

扱てこの叙述中における《僭越な心》*présomption* の変化は、La. 260 中に見られる《高慢》*orgueil* の低下に照応している。つまり、両断章中のこれらの叙述は内容的に一致しているのであり、したがってLa. 260は、La. 390の所属する章——15°《人間を知ることから神への移行》の章のうちに属すべきものと、判定しうるのである。

(131)——La. 261—Br. 386について。この fr. は、夢と人生との関係を述べたものであり、その終りの部分では、次のように述べられている——《……人生は、定めなさがいくらか少ない夢である……》と。ところで、7°章中のLa. 246—Br. 434中にも、《……一生の半分は眠りのなかで過ごされ、そこでは、その時にわれわれが感じるものがすべて錯覚である、……われわれが目ざめていると考えている一生の他の半分も、最初のものとは少しだけ違う他の眠りであり、そこからは、われわれが眠ると思う時に目ざめるのではないかどうかを、だれが知ろう。》という叙述があり、両者はその要旨におい

て一致している。それゆえ、La. 261は7°章にぞくする。

(132)——La. 262—Br. 580について。この断章は、次のごとくである——
《自然はみずからが神の影像であることを示すために、ある完全さを持ち、みずからの影像にすぎないことを示すために、ある欠陥を持っている。》この叙述によって、われわれは《自然》la nature が《神の影像》l'image de Dieu を有するものであることを、知るのであるが、同様の思想を、われわれは15°《人間を知ることから神への移行》中のLa. 390—Br. 72において見出す——《学識ある者は、自然は自分の姿とその創造主の姿 celle [image] de son auteur とをあらゆるもののなかに刻み込んだので、それらのものは、ほとんどすべてその二重の無限性をそこから受けているということを理解する。》(強調点は論者) こうしてわれわれは、La. 262を15°章中のものと判定するのである。

(133)——La. 263—Br. 490について。この fr. は、次のごとくである——
《人々は善行をすることに慣れず、なされた善行を見て、それに報いることにのみ慣れているので、神をも自己流に判断する。》ところで、La. 138—Br. 84では、次のことが語られている——《想像は、途方もない見積もりをして、小さな対象をわれわれの魂を満たすほどまでに拡大し、向こう見ずな思い上がりから、大きなものを自分の寸法にまで縮小するのである。ちょうど神について話すときのように。》この両断章の内容は、相補的な必然関係のうちにある。なぜなら、《神を自己流に判断する》のは、La. 263中に述べられているごとき人間の心的習慣と、人間の《想像》(La. 138)とが、複合ないし協力して産み出した結果にほかならないからである。かように両者は本質的に連関しているので、La. 263は、La. 138の所属する章——《想像力》の章(《欺瞞的諸勢力》の章)にぞくする。

(134)——La. 264—Br. 145は、パスカル自身の手によって抹消されているので、これを省く。

(135)——La. 273—Br. 130について。この fr. の内容は、以下のごとくである——《立ち騒ぎ。／もし兵士かあるいは労働者などが自分の労苦についてぶつぶつ言ったら、彼らに何もさせないでおくがいい。》この最後に述べ

られていることに就いての理由は、8°《気晴らし》*Divertissement* の章中にぞくする諸断章、就中 La. 269—Br. 139 において見出される——《……私がよく言ったことは、人間の不幸というものは、みなただ一つのこと、すなわち、部屋の中に静かに休んでいられないことから起こるのだということである。》、《人が求めるのは、われわれがわれわれの不幸な状態について考えるままにさせるような、そんなのんびりした、おだやかなやり方ではないからである。また、戦争の危険でも、職務上の苦勞でもない。そうではなく、われわれの不幸な状態から、われわれの思いをそらし、気を紛らせてくれる騒ぎを求めているのである。》(La. 273の小見出しの《立ち騒ぎ》*Agitation* と、La. 269の《騒ぎ》*tracas* との意味上の近似に注意。)

以上のごとく、La. 273とLa. 269とは、内面的に連関をもっているので、前者も後者と同様、8°にぞくする。

(136)——La. 274—Br. 137について。この fr. は、《気を紛らすということ》*le divertissement* を重要点としているので、同名の章(8°)に所属する。

(137)——La. 275—Br. 140について。この断章は、パスカルによって抹消されているので、これを省き、次に移る。

(138)——La. 276—Br. 135について。この fr. の結論というべき主旨は、《われわれが追求するのは、決して事物なのではなく、事物の探求なのである。》という叙述に存する。ところで、この叙述の内容に一致する文章が、8°章中に見出される——《彼らは、自分らがさがし求めているのは、狩りだけなのであって、獲物をとらえることではないということをおぼえていないのである。》(La. 269—Br. 139) それゆえ、この一致により、La. 276は8°章にぞくする。

(139)——La. 277—Br. 138について。この fr. は、《人間は、屋根屋だろうが何だろうが、あらゆる職業に自然に向いている。向かないのは部屋の中にじっとしていることだけ。》という内容のものであるが、これはLa. 269(8°章)の始めの部分と、主旨において変るところはないので、この断章も8°章に所属すると、言える。

(140)——La. 285—Br. 525について。この fr. は、人間の偉大さと低劣さ

とにかんする《哲学者たち》の主張の欠陥を述べたものであるから、この断章は、9°《哲学者たち》**Philosophes**の章に入る。

(141)——La. 286—Br. 465について。このfr. は、ストア学派の人たちの幸福論を述べているが、9°章全体は哲学者の幸福論とこれに対する批判とをテーマにしているから、この断章は同章にぞくする。次に、La. 286中のストア派の所説と、La. 281(9°章所属)中の哲学者の言葉とが、一致していることも、これを証している。

(142)——La. 287—Br. 395について。このfr. は、《独断論》**le dogmatisme**、《懐疑論》**le pyrrhonisme**という哲学的意見について論じているので、9°《哲学者たち》の章に属する。

(143)——La. 288—Br. 220について。このfr. には、《靈魂の不死を論じなかった哲学者たちのあやまり。……》という主旨が述べられており、これは、未分類断章のLa. 292—Br. 219の次の叙述と、関連をもっている——《魂が死すべきものであるか、死なないものであるかということが、道徳に完全な差異を与えるはずであるのは疑う余地がない。それなのに哲学者たちは、彼らの道徳をそれとは独立して導いた。》この引用文中の《道徳》**la morale**なるものは、9°章中に出てくる哲学者の意見に関係するいろいろな言葉——《道》**le chemin**・《「道，真理」》**Via, veritas**・《悪徳》**les vices**（以上La. 278—Br. 466中のもの）、《墮落》**corruption**・《神を愛しあがめる感情》**sentiments pour l'aimer et l'adorer [le=Dieu]**・《十全な理想》**toute perfection**・《幸福》**bonheur**（以上La. 280—Br. 463）、《不徳》**vicieux**（La. 282—Br. 360）、《三のつ邪欲》**les trois concupiscences**（La. 283—Br. 461）、《名誉欲》**le désir de la gloire**（La. 284—Br. 350）——の意味するものの総合的全体と密に連関している。したがって、La. 292およびこれと関係を有するLa. 288は、9°章に属することになる。

(144)——La. 289—Br. 378について。このfr. の結論として述べられている要旨は、《人間の魂の偉大さは、中間にとどまるのを心得ることである。》（強調点は論者）という点に存する。したがってこのfr. は、6°《偉大さ》

の章に属すべきものである。

(145・146・147)——(145) La. 292—Br. 219について。この fr. については、既に所属すべき章(9°)が、決定している(143参照)。なお、(146) La. 290—Br. 375および(147) La. 291—Br. 387の両断章は、パスカル自身によって rayer されているので、これを省く。

(148)——La. 293—Br. 394について。この fr. は、《懐疑論者、ストア哲学者、無神論たちなどの原理》leurs principes … des pyrrhoniens, des stoïques. des athés, etc. について述べているものであるから、9°《哲学者たち》の章にぞくする。

(149)——La. 294—Br. 394について。この fr. 中の《宗教に対する大言。「私はそれを否定する」……懐疑論は宗教に役立つ。》は、無神論と懐疑論という哲学的意見にかんするものであるから、9°章にぞくする。

(150)——La. 295—Br. 432について。この fr. は、人間本性の偉大さないし低劣さの何れかを独断的に主張する説に対して、懐疑論が——キリスト教の立場から見て——有効である所以を、説くものである。かようにこの断章は、懐疑論の有効性にかんするものであるから、La. 294の《懐疑論は宗教に役立つ。》という叙述と連関する。したがってこの fr. (La. 295) は、La. 294の所属する9°章に入る。

(151)——La. 296—Br. 51について。この fr. は、《強情者としての懐疑論者。》というものであるが、その主旨は、次のところに存する——懐疑論者は自説を頑固に主張するが、これはその反対を固持する立場と同じく、一面的真理を主張するものにすぎない。そうしてこれら一面的真理を包容する全面的真理を説くものこそ、キリスト教にはほかならない。これが、パスカルの思想的立場であり、既出のキリスト教的中庸論(La. 289 — 144参照)は、じつにこのことを示すものである(なおLa. 409—Br. 433参照)。それゆえLa. 296は、La. 285とも、また各学派の主張する原理の一面性を説くLa. 293—Br. 394(148参照)とも関係するので、9°《哲学者たち》の章にぞくすると、判定しうる。

(152)——La. 297—Br. 78について。《無益で不確実なデカルト。》——こ

れが、この fr. の全内容である。この叙述は、抽象的で、われわれはその具体的内容を知りえないが、パスカルの姪マグリット・ペリエの『覚え書』にもとづく『ゲリエ第二写本』(La. 1001—Br. 77) は、その内情を示している、とおもわれる——《私はデカルトを許せない。彼はその全哲学のなかで、できることなら神なしですませたいものだ、きっと思っただろう。しかし、彼は、世界を動きださせるために、神に一つ爪弾きをさせないわけにいかなかった。それからさきは、もう神に用がないのだ。》この文章は、デカルトの神観に対するパスカルの批判を示しているが、批判の対象となったものは、哲学史上有名なデカルトの神の存在にかんする人性論的証明であったと、推定される。なぜなら、パスカルは、14°章中のLa. 382—Br. 549で、《イエス・キリストなしに神を知ることは、たんに不可能であるだけでなく、また徒勞である。》と、述べているからである。われわれの推定の正しさは、この文中の《徒勞》(inutile) という言葉と、《無益で不確実なデカルト。》における《無益》(inutile) なる語との一致である。

また14°章中のLa. 381—Br. 543の冒頭で、パスカルは次のごとく書いている——《序言。神の形而上学的証拠は、人々の推理からはなはだかけ離れ、その上すこぶるこみいっている、さして感銘を与えない。》この叙述から推しても、パスカルがデカルトの形而上学的証明に対して否定的であることは、明白である。以上、14°の《この神の証明方法の卓越》Excellence de cette manière de prouver Dieu の章にぞくする二断章およびLa. 1001—Br. 77との連関から見て、La. 297—Br. 78は、14°に属するものと、言いうる。

(153)——La. 298—Br. 385について。(イ) —— fr. は《懷疑論》Pyrrhonisme なるタイトルを有している。ところでLa. 213—Br. 392のタイトルは、《懷疑論反駁。》Contre le pyrrhonisme となっている。さて《アポロジー》の著者たるパスカルの立場から見ると、ピロニスム(懷疑論)を反駁するためには、先づピロニスムの何んたるかを、読者に対して説明提示しておかばならない。それゆえ、ピロニスムの内容を要約したLa. 298は、La. 213の前提となるものであり、したがって両断章は、内面的連関を有しておるのである。それゆえLa. 298は、La. 213を含む章たる6°《偉大さ》の章に所属せ

ざるをえないのである。(ロ) ——次に、La. 213の末尾には、ピロニスムについての極めて簡略なる叙述があるが、これはLa. 298の詳述を前提していることを物語るものであって、(イ)の事実を裏書している、言いうるのである。

(154)——La. 301—Br. 426について。この fr. は、《**眞の本性が失われた**ので (La vraie nature étant perdue,)、すべてのものが彼の本性になる。云々》(強調点は論者)とあるので、15°bis 《本性は墮落している》の章に属する。

(155)——La. 302—Br. 544について。この fr. は、《**キリスト者の神は、神が唯一の善であること、魂の十全な平安は神のうちにあること、魂の唯一の喜びは、神を愛するにあることを、魂に感じさせる神である。**》この断章の主旨は、畢竟《**唯一の善**》unique bien すなわち至福(至上善)なるものが、キリスト教の説く神にのみあるということである。したがってこの fr. は、10°《**至福**》La Souverain Bien の章にぞくする。

(156)——La. 303—Br. 74bis について。この fr. は、《**二百八十の最高善**》deux cent quatre-vingt souverains biens について触れているので、10°章にぞくする。

(157)——La. 304—Br. 363について。この fr. は、九つの引用句から成っているが、このうち第一番目の引用句と第二・第三番目のものおよび第八番目のものは、人間的規準——例えば、集団の決議、哲学者の言説、大衆の意見——は、正邪・善悪の眞の規準にならないことを、述べたものであり、《**至福**》(最高善)の問題と関係している。また第四番目の引用句、第五番目句、第七番目のそれ及び九番目のものは、それぞれ苦悩、適正、健全さ、個人に相応しいやり方にかんするものであって、やはり人々の理想的な状態ないしゆき方、つまり最高善とつながりを有している。それゆえ、この断章は、全体として最高善(至福)になんらかの仕方で連関をもつものであり、したがって10°章に属すべきものと、判定しうる。

(158)——La. 305—Br. 462について。この fr. のタイトルは、《**眞の善の探求。**》Recherche du vrai bien となっているので、当然10°章にぞくする。

(159)——La. 306—Br. 422について。この fr. も、《真の善の探求》と深い関連にあるので、10°章に入る。

(160)——La. 307—Br. 182について、この fr. の前半は、いつも都合のよい希望を持った人間が、困難な事件に際して、風向きが悪くなってもそれ相応に悲しまないという場合がある旨を、述べたものであり、断章の後半は、こうした現象の理由を洞察したものである。したがってこの fr. は、5°《現象の理由》の章にぞくする。

(161)——La. 308—Br. 488について。この fr. の要旨は、次の点にある——《……だが、神が本源（*principe*）でないならば、決して終極（*fin*）ではありえない。》ところでこの主旨と密接に連関するものが、16°《他宗教の虚偽》*Fausseté des autres religions* の章にぞくするLa. 399—Br. 489 中に見出される——《もしすべてのものの唯一の本源（*principe*）があり、すべてのものの唯一の目的（*fin*）があるならば、——すべてのものはそれにより、すべてのものはそのためにある——したがって、真の宗教はわれわれにそれのみを崇め、それのみを愛すべきことを教えなければならない。》それゆえ、La. 308は16°章に属するものと、言える。（XIV 回了）